泌尿器科紀要

第 8 巻　第 2 号

昭和37年2月

随　　想

今更ながら気になることなど

東京都虎之門診療所　金　子　栄　寿

慶応の学窓を辞し，開業既に満6年になるが，長年の間泌尿器科学教室（講師8年，助教授15年）にいたので，色々と，やつてみたいと考えていた研究テーマ．やりかけたままの業績，発表せずじまいになつてしまつたものなど，今でも様々と思い出される．

殊に論文につくり上げて発表しなければならなかつたものいわば学会に対する「借り」みたいなものもあつて，この借りつ放しの不義理に就ては，気にもなり，心苦しいものだと思つている．

大平洋戦争もその初めの頃，今から思うと，不思議なくらい，研究費に恵まれていて，支給された全額を，どうして費うかに，むしろ苦労したものだつた．応召されて，教室に人が居なくなつたからだ．それで実験器具など贅沢に揃えたり，実験動物も，かなり無駄にしたりしても，それでも費いきれなくて，徴用のがれの画家を，ラボラントールに雇用し，これで人件費を計上したりして，支出額を増すという具合だつた．

マグヌスの装置も，その時に，こうして揃えた実験器具の一つだつた．生の臓器を，この装置にかけて，面白いように動くのを観て喜び，特に，尿管と精管の運動は，キモグラフオンでグラフにすると，様々の面白い現象が見られた．

人間から，生のままの尿管とか，精管を，直接採取するなどは，泌尿器科医だけに出来る，一つの特典みたいなものだつた．殊に，当時は，腎結核の治療には，早期腎摘出が第一というわけで，病変が少しも及んでいない，無傷の尿管を手に入れることも，割と容易だつた．精管にしても同じだ．

それで，これ等の材料に，植物神経毒の色々のものを作用させて，その動きの違いを，グラフにすると，きれいな記録がとれた．これは，泌尿器科医だけしか，完成出来ない業績だと，得意になつたものだつた．

横倉氏の学位論文，「精管の運動云々」は，この時に，まとめられたものだが，尿管に就てのものは，遂に未発表に終つている．泌尿器科でも，腎摘を余りやらなくなつた現在，殊に，病変の及んでいない尿管を手に入れることなど，殆ど不可能になつた今となつては，もう追試も，不可能のことかもしれぬ．すると，これは貴重な記録といえよう．それが，発表もみずに，戦災で総てをホゴにしてしまつたことは，戦時中の，貴重な研究費に対して，真に申し訳のないことである．

自分の学位論文である，「早期腎結核」は兎に角として，長年教室にいても，まとまつた仕事というものをやつていない　宿題報告を受け持たなかつたせいでもある．一度，済生会病院に在勤中，その話も出たが，故北川教授が，共同でやろうと云われたので，気乗

りがせず，そのままになつてしまつた．

29年の秋の，関東東北連合地方会に，横浜大学の原田教授の肝入りで，特別講演をおおせつかつた．喜んでお受けし，撰んだテーマが，「女子尿道及びその疾患」である．未だそれまでに日本では同じテーマの，詳しい研究が泌尿器科領域にも，婦人科領域にも行われていなかつた．それで，非常に興味を持つて女子尿道と取り組んだ次第である．

先ず，女子尿道の材料を集めることにした．これは，現札幌医大の法医学の教授である八十島氏のお骨折りで，当時氏が勤めて居た，監察院から求め得た．かなり貴重な材料である．当時，教室員だつた蔡氏が，組織学的にこれを研究し，連合地方会で，その一部を講述するまでにはまとめてもらえた．しかし，業績とはなつていない．この研究は，充分，学位論文として価値があるものと考えたのだが．蔡氏は，別に，教授からのテーマで学位をとつている．

日本人の女子尿道の長さは確知されていなかつた．そこで当時婦人科の助手をしていた細川氏に依頼して，正常・妊娠・婦人科的疾患と色々の場合のものを，詳しく調べてもらつた．これは慶応の婦人科から学位論文として発表されていて，婦人科教室の業績になつている．また女子尿道と膀胱及び性器の位置的関係を求めて，レ線学的の研究を当時国立第一病院の婦人科に居た桜井氏が担当してくれた．かなり苦労して出来た業績で，勿論，学位論文として発表された．

更に女子尿道内の細菌を細菌学に造詣の深い当時，川崎市民病院の医長だつた岩田氏が受け持つてくれた．氏の指導で，一二の教室員が，これにたずさわつたが，完全には物にならず，漸く，日本鋼管病院勤務の西蔭氏が，更に研究を重ねて，自分が教室を去つた後で，論文に完成している．しかし，自分の手からは，全く離れたものである．

このような訳で，業績としてまとまつたものがあり，未完成のものがあり，また，業績にまとまつたものも，慶応泌尿器科教室に属するものもあれば，そうでないものもある．そして，立派な業績に出来上つていても，この中で，自分の苦労に報いられるのは，論文末尾の感謝の言葉だけということになる．何だかつまらないような気がする．

それはそうと特別講演をひき受けてから，1年と少しの間のその準備のための苦労は本当に身にこたえた．それでいて，講演までに出来上つたのは，女子尿道に就ての概略だけである．色々の項目に就ては，もつとやらねばならぬことが沢山残つている．

その当時，つくづく思つたことは，まとまつた仕事というものは，教授でなければ，到底やれるものではないということだつた．助教授というものの，職権の上での無力をよく味わされた．ある意味で，生殺与奪の権を持つ者でなければ，人は動かせないし，人が動かねば，何も出来るものではない．

特別講演は，折角ひき受けたものの，思うように研究は捗らないし，その期日は容捨なく迫るし，その1年というものは，焦りとはがゆさで，世の総てが，こんなにも灰色に見えたことはない

教室を辞し，そして開業へと踏んぎりがついたのも，この特別講演の苦しみが誘因となつている．開業で，日々をその方に追われて居ては，到底，「女子尿道」も，完成は難かしいだろう　婦人科叢書の一部として書くように云われたこともあるが，到底駄目だ．となると，講演の責任をはたしただけのことで，尻切れトンボということになる．

学会の御好意で与えられた，特別講演担当の栄誉も，これでは何にもならぬ．

これが気にかかるから，その折に集めた多数の文献も，苦労して出来たデーターも，机の上に積んだままになつている．片づけてしまう決心が，未だにつかないのである．